



今月のテーマ：「緩和ケアに参加して ～精神科の立場から～」

精神科医に求められていること

緩和ケアに参加して約2年がたちます。

当初の予想では、うつ病などの反応性の気分障害が多いように思っていました。しかし、参加してみて判ったのは、“**思いのほか、意識障害の鑑別が精神科医に求められていること**”です。軽度の意識障害は、実は発見するのが非常に難しく、眠気が強いように思われたり、逆に怒りっぽく見えたり、意地が悪くなったように思われたりします。時には睡眠がずっと続いているようにも思われます。“**起こしたら目が覚めるかどうか**”が一番簡単で有用な診断方法なのですが、ステロイド、モルヒネ、鎮痛剤、睡眠薬、抗うつ剤などを使用すると起こりやすく、鑑別が結構難しいと感じています。



患者さんの心の支えになる

その他、精神科医に求められていることは、やはり“**精神科らしいサポートとして心の支えになること**”でしょうか。でも不思議に思われるでしょうが、これが一番難しい。テレビでやっているようにはいかないのです。精神分析に憧れてこの科を選びましたが、それは現実には難しいようです。

逆にコンピューターの普及に伴い、機械としての人間の脳の理解が進んできています。でも精神科医としては、やはり人間という生き物を機械としては見たくありません。人の話を最後まで聞く、という重要性は理解できるようになりました。おそらく、緩和医療を受け入れたといっても、患者さんが日々迷わずに過ごされていることはないように思います。

“生きたい”という気持ちは必ずあると思います。私自身、父親の最後は緩和専門の病院でした。しかし、この医療はがんと闘わないというもので、何もしないのが原則でした。これは見ていて辛かった。何か出来ることはあると思って見ていました。



人生を記憶にとどめる手伝いをする

今心がけていることは、“**できるだけ、その人の人生を記憶にとどめるお手伝いをしてあげる**こと”です。すべての人が自分だけのストーリーを持っているはず。それを記憶にとどめることが、大切なことのように思います。物として人生を終わらせたくはないのです。それは寂しい。

それから、何につけても先祖はありがたいと思います。何しろ先に向こうへ行っているのですから。そう考えれば、何をするのも決して一人ではないのですね、我々は。だから、先人たちが残してくれたエピソードを語り伝えてあげることも大切です。正岡子規の『へちま三句』はいいですね。『御釈迦おしゃかさんが、最後の旅で毒キノコを食べさせられて、それでも81歳の老人が下血をしながら歩き続けて、最後の瞬間まで、自分に毒を食べさせた無知な鍛冶屋が非難されることを心配した』、この話もいいですね。



何とか、もたえ苦しむような最後を防ぐことに役立ちたいと思います。